

木林学

中川 典子

ある日、東京都渋谷区の小学生、さくらちゃんからメールが来ました。クラスの研究班で大好きな和菓子のことと地球温暖化について勉強したいけれど、どんなことから始めたらいいか？という質問で、嬉しい反面、とても驚きました。高層ビルが建ち並ぶ東京の小学生たちが、多量の雨や気温の変化などを体験し、自然環境という



ものに強く関心を持っていることです。

近年、日本の森や山、木材状況は悪化の一途をたどっています。気温が高いため伐り倒すの遅延、アジアから来る虫の影響による虫喰い被害、里山の減少、山のサイ

クルの変化など、便利な世の中と引き換えに危機的な自然環境となっています。また昨今では、原油価格の高騰やロシアの関税値上げ、建築ブームにある中国の建築材消費拡大により輸入材が入りにくくなり、今こそ国産材、地域材の需要が大切と考えられています。

歴型の都市形成を研究されています。その研究を通し、あらためて思い知らされたのは、たまた国産材、地域材を多く使えば良いというのではなく、住み手・施主が「使い捨て」住宅でなく居住意識を高く持つこと。地域独自の建築と結びつけた文化や施工技術を継承し、素材の信頼性を高めたいうえで、いかに需要と販路を確立していくかが今後の環境型産業を生み出す鍵だと思えます。

二〇〇五年に発効した京都議定書を生み出した京都から国産材、地域材に関心を持つ、それがまず活用の第一歩なのです。

(銘木善吉)

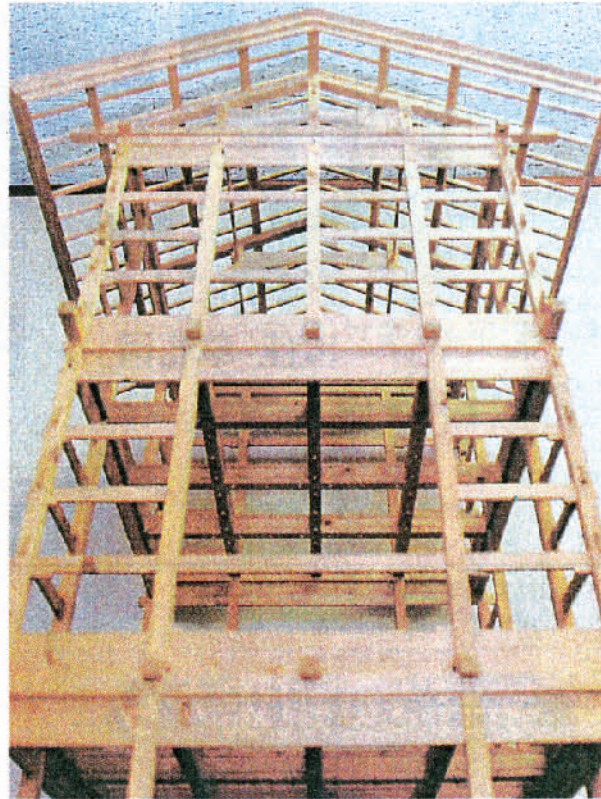
長く住み続ける意識を

域材を消費するのという課題が出てきます。

京都女子大の北尾晴雅准教授は、京都の伝統住宅であり、現代に生きる長寿型木造住宅として、町家に見られる環境性能にいち早く注目。木造住宅における環境配



次回は10月27日に掲載予定です。



木造建築の構造などは初めてという学生も、北尾准教授の解説に熱心に聞き入る(京都市東山区・京都女子大)

木組上軸組構造(スケルトンアンドフィル)で作った町家模型。間伐材や小径木を多用しつつ伝統的技法をいかした工法で、町家の環境性能がうまく発揮される。北尾准教授が木工の志村昌男さん(故人)とともに開発。6分の1の模型は志村さんが実際と同じ建築技術で組み上げた(京都市伏見区・シムラエ務店)



光注ぐ、京都の木々。地域材の活用はこのようにできるのだ。



国産材・地域材を使いつつ、いかに京都独自の建築文化を守るのか。図面やデザイン、林業調査など資料があらゆる。(京都女子大)



スウェーデンの建築家カリリンさんの著書「MACHIYA」(中央)。後方は、町家を題材に環境保全型都市への提案をつづった北尾准教授の書籍。ヨーロッパだけでなく、韓国、中国でも出版されている

木造建築の魅力はフレキシビリティ(自由さ)がある」とまとめた。また、オランダ・デルフト工科大のデューベスタイン教授は、いかに環境型都市を形成するのかわり提案を世界中から集め、北尾准教授の京町家の伝統から発想する長寿型住宅の開発が論文集に掲載されています。

最近では、韓国や中国でも都市開発で高層ビルが建ち並び、自国独自の古き建築物が減少。木造建築の衰退は、自然環境の保全や都市が抱える課題と密接に関係しているように思えます。

森づくりと街づくりのバランスを保ってきた日本の「木の文化」。世界が認める日本建築の良さ、伝統に思いつく意匠や技術の魅力とともに「環境価値」という新しい付加価値を世界に発信できるのではないのでしょうか？

世界が目にする木造建築 環境に優しい町家

数年前、わが社で研修し現在ストックホルム国立工科大で建築を教えているスウェーデンの建築家カリリン・ラフグレンさんは、七年前に町家を研究。町家は骨組みとしての構造部材がしっかりしていれば、間取りを変えたり改修して住み続けることができること、海外では「パース」として見られない建築部材を色・艶・年輪の細かさなど吟味して素材にする点、独特の建築技法や意匠、慣習などを挙げ、「日本の

